

教師の捉える現代の子どものリズム感とその指導

水 野 伸 子

岐阜女子大学文化創造学部文化創造学科

(2013年9月19日受理)

Study of Systematic Rhythm Exercises in Elementary School Music Education

Department of Cultural Development, Faculty of Cultural Development,
Gifu Women's University, 80 Taromaru, Gifu, Japan (〒501-2592)

MIZUNO Nobuko

(Received September 19, 2013)

要 旨

リズムは音楽の中核をなすことから、子どものリズム感の育成は重要な指導事項である。しかし、母語の影響から、日本人と西洋人のリズム感は異なっているため、西洋音楽を基本とする学校音楽教育では、「音楽的文化的化」という観点からも子どものリズム感を捉え、指導に生かしていかなければならない。このリズム指導に対する教師の考え方や指導の現状を、質問紙調査より調べた。その結果、子どものリズム感の二極化傾向や系統性に欠けるリズム指導の実態を把握することができた。

〈キーワード〉 リズム感 リズム指導 音楽的文化的化 教師 教材開発

1. はじめに

「はじめにリズムありき」と音楽を表現したのは、ベルリン・フィルの初代指揮者ハンス・フォン・ビューローであるが、時間芸術の音楽にとって、時を刻むリズムは最も重要な要素であろう。

そして、このリズム指導において、ダルクローズ、コダーイ、オルフなどの偉大な音楽教育家達は、独自の指導法をもつ。また、難波（2011）は、アメリカの教科書「Share the Music」（1995年版）においても、拍子やリズムが段階的に指導されていることを報告し

ている。

このように、リズム指導は音楽教育の中で最も重要視される内容の1つであると捉えられるが、日本では、さらに「音楽的文化的化」（Musical enculturation）（Corrigall, K & Trainor, L (2010)）という観点からも、これを検討していかなければならない。

何故なら、日本人は独自の音楽感覚を有していながら、経験的に西洋音楽を習得する環境にあるからである。水野（2013）は、終止音（和音）を詳細に条件統制をした実験を実施し、調性感やハーモニー感における音楽的文化的化が4歳から5歳にかけて大きく進むこ

とを明らかにした。

元々、西洋の言語には強弱のアクセントがあるが、日本語は高低のイントネーションで表現される。したがって、日本の伝統音楽（わらべ歌や民謡等）には、西洋音楽にあるような強拍や弱拍は存在しない（小泉1980）。大串（2010）も、異なったリズムで演奏する日本とヨーロッパのピアニストの演奏実験データと、日本語とヨーロッパの言語間におけるリズムの比較研究結果を対応させ、母語がリズム感へ強い影響を与えている可能性を示唆した。

このように、日本人と西洋人のリズム感は異なっているにもかかわらず、日本の学校音楽教育は西洋音楽の様式を基本とし、TVや街中で流れる音楽もほとんどが西洋音楽である。つまり、日本の子どもは、西洋音楽のリズム感を経験的に学習していくのである。したがって、学校音楽教育は、こうした「音楽的文化化」のプロセスを理解した上で行われるべきであろう。

しかし、1999年に日本の伝統音楽の指導の充実を目指した第七次学習指導要領が告示されて以来、日本学校音楽教育実践学会等においても、伝統音楽を扱う実践研究は活発に行われるようになったが、「音楽的文化化」に関する研究は大変少ないのが実情である。

古いものではあるが1980年前後の研究からは、子どもの実態に即したリズム教育を模索する研究がいくつか認められた。上畠ら（1979a）は、小学校歌唱教材のリズムパターン分析を行った結果、3/4と6/8拍子の曲の、実際の子どもの趣向実態と教科書の差異について言及した。市販されている児童向け歌集やマスコミから流れる児童向けの曲に、3/4と6/8拍子の曲の割合が極めて低い（市販されている児童向け歌集では5%）にも関わらず、教科書では全体の20%強を占めてい

ることを指摘し、拍子を網羅的に体験せしめんとする教育課程上の配慮があると論じた。

さらに、上畠ら（1979b）は、児童の下位レベルのリズム認知特性について小学校での調査・実験結果と学校音楽教育実情とを照らし合わせて検討し、日本音楽の大ノリや中ノリに通ずる要素が看過されている現状を指摘した。

また、井戸（1990a, 1990b, 1990c, 1991）は、ヴァンサン・ダンディの主張する主アクセント（男性的リズムと女性的リズムによって決定されるアクセント）と表情アクセントから楽曲を詳細に分析し、リズムのグルーピングによって拍子が結果的に形成されることを明らかにした上で、リズム指導の重要性、及び指導上の留意点について詳しく述べている。

この他、音楽心理学の見地から藤村ら（2008）は、リズムの知覚においてDrake（1993）の研究を紹介し、成人の音楽熟達者は成人の音楽非熟達者や5歳児、7歳児よりもより詳細なリズム知覚ができることから、リズム教育の必要性を示唆した。

このようなリズム感の育成に関する研究は、個々の研究者によって行われてはきたものの、全体的には継続されず、また「音楽的文化化」との関連から論じたものはほとんど見られない。

日本の伝統音楽の理解と音楽的文化化のプロセスを踏まえた西洋音楽の指導は、学校音楽教育の両軸となるものであり、後者の代表的なものの1つにリズム指導があると考えられる。

そこで、本研究では、実際に指導する立場にある教師を対象に質問紙による調査を実施し、子どものリズム感の実態や学校音楽教育におけるリズム指導の現状を把握すると共に、リズム指導カリキュラム開発までを視野に入れたリズム教育研究の基礎資料を得るこ

とを目的とする。

リズムをどのように定義づけるかについて、後藤（2000）は、音楽心理学の立場から、リズム研究者であるクレストン（1968）やFraisie（1982）等の説を紹介して「リズムを一意に定義することは不可能に近い」と述べている。このように、リズムという語の持つ多面性を十分認識したうえで、阿部（1984-1985）による次の説を本論では採用する。「リズムは、拍・拍子、さらには、それらより大きな階層的群化構造までも含んだ知覚構造の総体を意味する」。

2. 方法

2.1. 調査概要

期日：2013年8月22日 17：30—18：00

調査対象：筆者らの実施した教員免許状更新講習の受講者29名（男性3名、女性26名）を対象とし、全員から回答を得た。

方法：教員免許状更新講習終了後に質問紙による調査を一斉に行った。

2.2. 質問項目

調査参加者の人数が29名と少ないことから、量的分析を主目的にするのではなく、自由記述の内容から質的分析ができるよう配慮した。

また、現代の子どものリズム感の実態、及び学校音楽教育におけるリズム指導の現状を詳細に把握できるよう、以下の内容から質問項目を設定した。

- ・調査参加者の教育経験
- ・子どものリズム感にみる社会的影響
- ・リズム活動に対する子どもの意欲
- ・音楽表現におけるリズム上のつまずき
- ・リズム指導に関する教師の意識
- ・系統的なリズム指導教材の必要性

3. 結果

3.1. 調査参加者の教育経験

参加者の調査時における勤務校種の内訳は次の通りとなった（図1）。

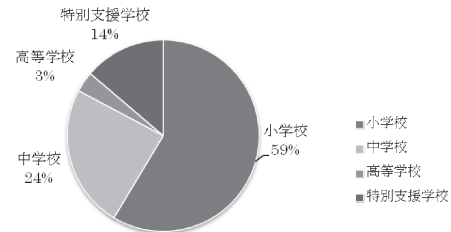


図1 調査参加者の勤務校種内訳

図1から、調査参加者の半分以上が小学校教員（59%）であり、小学校教員と中学校教員を合わせると83%となった。

年齢の内訳は次のようになった（図2）。

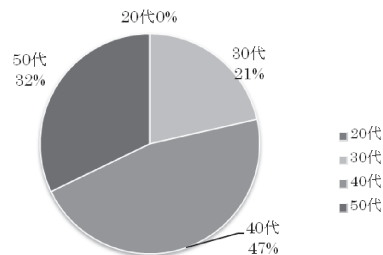


図2 調査参加者の年代別内訳

図2から、40代の教員が半数近く（47%）を占め、50代と合わせると79%になり、30代教員を含めると100%となった。

また、参加者の専門教科の内訳は以下のようになった（図3）

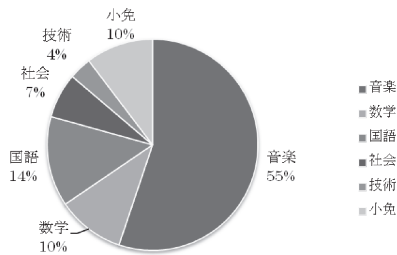


図3 調査に参加した教師の専門教科

図3から、音楽教師が約半分（55%）、それ以外は偏りなく教科が散らばっていた。

以上の結果から、調査参加者は、30代以降の教師であるなど、長年の教育経験を踏まえて回答されたことが示唆された。

3.2. 子どものリズム感にみる社会的影響

現代の私達の生活は、西洋音楽を耳にする機会にあふれている。学校の授業で習う曲や給食時・下校時にかかる音楽以外に、日々の生活の中で、たとえばテレビ、スーパー・外食店・百貨店・アミューズメントパーク内で用いられる曲は、西洋音楽の様式で作られたものがほとんどである。日本音楽を聴くことの方が難しい。そうした環境による影響は、子ども達のリズム感覚に現れているのだろうか。それを調べるために、以下の問いを設定した。

- 4-1. 子ども達は、毎日、意識するしないに関わらず、西洋音楽をシャワーのように浴びています（スーパー、ゲーム、外食店等）。子ども達のリズム感は、年々（昔、または少し前と比べて）良くなっていると感じますか。
1. 非常に感じる
 2. 少し感じる
 3. あまり感じない
 4. ほとんど感じない
- 4-2. そのように感じた理由を、教えてください。

4-1の結果は、次のようになった（図4）。

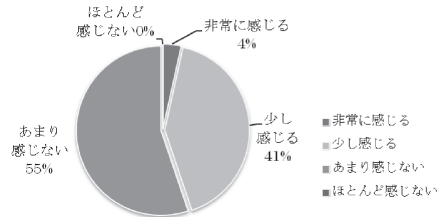


図4 子どものリズム感覚に対する向上感

図4の結果を、調査参加者を音楽教師に限定して整理しなおすと、図5のようになった。

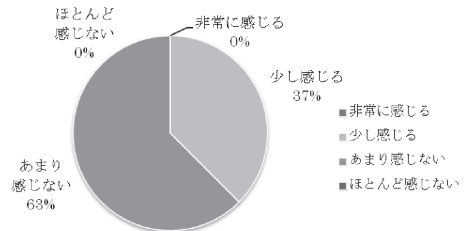


図5 音楽教師の捉える子どものリズム感覚に対する向上感

図5から、子どものリズム感の向上を「非常に感じる」と答えた教師は、音楽専門の者には一人もいなかったことがわかる。それ以外については、図4の傾向がいっそう強まった結果となった。

この4-1の回答に対する理由を4-2において自由記述で求めたところ、4-1で最も多かった「あまり感じない」と答えた教師（55%）からは、次のような子どもの音楽反応時の姿が記された。括弧内の数字は「あまり感じない」と答えた教師の中での相対度数である。

- ①リズムにのれない（6%）
- ②無表情である（6%）
- ③（中学生でありながら）簡単なリズムを真似することが、すぐに出来ず、3連符やシンコペーションのリズムに合わせるのに時間がかかる（6%）

- ④身体で音楽を感じて揺れたり、リズムに合わせてたりすることが苦手な子どもが多い（6%）

さらに、こうした子どもの音楽に対する消極的な行動は、現代社会の音楽を濫用ともいえるような使い方や、それに伴った日常の音楽と人との関わり方に原因があると、次のように指摘し問題視する教師もいた（3名）。

- ・ 日常に音楽があふれすぎていて、それを聴いているのではなく、聞き流している
- ・ 空気のようにある音に対し、意識して聴こうとせず、感情も伴っていない

また、次に回答率の高かった「少し感じる」と答えた教師（41%）からは、以下の子どもの姿が記述された。

- ①中高生のカラオケのノリが良くなっている（17%）
- ②運動会のダンスを覚えるのが早く、テンポの速い曲でも抵抗なく踊れる（25%）
- ③裏打ち、シンコーペーションなど、お年寄りには難しいリズムを打てる子どもが多い（17%）
- ④リズムの難しい歌謡曲を歌う子どもがいる（25%）
- ⑤授業の中で、歌を覚えるのが早い（25%）

しかし、こうしたリズム感のいい子ども達は少数であり、音楽に興味を持って親しみリズム感の優れた子どもがいる一方、関心が低くリズムにのれない子どももいるという二極化傾向を指摘する教師も多く、それは先の「あまり感じない」と回答した者からも認められた。

さらに、一日の多くの時間を音楽の鳴っている中で暮らしている、そうした環境が、かえって音楽を騒音化させ、人と音楽との心的なつながりを希薄にさせていく危険性についても指摘する記述が認められた。

3.3. リズム活動に対する子どもの意欲

次に、子ども達はリズム活動に対しどのような姿勢で取り組んでいるのかを次の設問から調べた。

- 5-1. 子ども達は、授業の中でリズム遊びや活動（リズムを叩く、リズムアンサンブル等）に意欲的に取り組んでいると感じますか。
1. 非常に感じる 2. 少し感じる
 3. あまり感じない 4. ほとんど感じない
- 5-2. そのように感じた具体的なエピソードを、教えてください。
- 5-3. 子ども達がリズム活動に意欲的に取り組む（取り組まない）のは、なぜだと思いますか。その理由について、予想されることを書いてください。

5-1の結果は、次のようになった（図6）

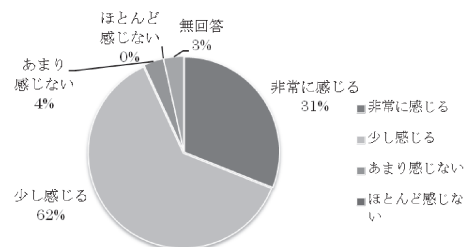


図6 リズム活動に対する子どもの意欲

図6からリズム活動に対する子どもの意欲を「非常に感じる」「少し感じる」と答えた教師を合わせると93%になり、ほとんどの子どもが程度に違いはあれ、リズム活動に意欲的にとり組む様子が窺えた。さらに、問5-2の、そのように判断した根拠となるエピソードについては、リズムを叩く打楽器に興味を持って取り組む様子や、ボディパーカッション等の身体運動を伴ったリズム活動や、小学生の低学年では言葉遊びやお手合わせと言ったリズム遊び等を楽しむ報告が認められ

た。

このように意欲的に取り組む理由は何かという問5-3に対しては、次のような回答が多かった。括弧内の割合は5-1の「非常に感じる」と「少し感じる」と答えた者の中での相対度数である。

- ①器楽や歌唱は上手下手が明らかになるが、リズム活動はそれがわかりにくく、技術的にも簡単なことから誰もが楽しく取り組むことができる (22%)
- ②身体を使って表現することが楽しい (19%)
- ③みんなとリズムが合ったときの感動が大きい (15%)

このように、リズム活動の良さをあげる一方、それを指導することの難しさについて、次のように記述する教師もいた。

- ・子ども達は、取り掛かりは喜んで練習するが、上達するだけの時間や指導が足りないため、すぐに飽きてしまう。
- ・楽しくは活動するが長時間は持たない。それは、基本的なリズム感が育っていないことや、教材研究の甘さから実態に合わない活動をしていることが考えられる。

これらからは、リズム活動が個人的な音楽経験や歌唱力等の技術的個人差に影響されないで、皆が平等に楽しむことができる一方、指導書等に一貫した指導計画がないため、系統的な指導が行われていない現状が浮かびあがった。

3.4. 音楽表現におけるリズム上のつまずき

それでは、実際に音楽表現する上で、子ども達は、リズム的なことにどのくらいつまずいているのであろうか。その実態を、以下の設問から調べた。

6-1. 今までの音楽の授業の中で歌ったり合奏したりする際、また全校合唱や合唱コンクールなどの校内音楽活動の取り組みの際などに、子ども達がリズムにつまずいているなあと感じた経験はありますか。

1. ある 2. ない

6-2. そう感じられた時のことを詳しく教えてください (○年生の子どもが、○の活動時に……)。

6-3. 6-1で「ある」と答えられた先生は、その時、どのような対処 (指導) をされましたか。

6-1の結果は、次のようになった (図7)

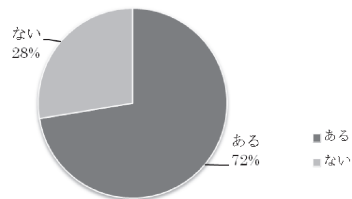


図7 音楽活動の中で生じるリズムに関するつまずき

図7から、ほぼ3/4の教師が、今までの指導経験の中で、子ども達のリズム上のつまずきを感じていることが示された。

さらに、それを表すエピソードの記述からは、以下の内容が記された。括弧内の数字は「ある」と答えた人数に対する相対度数である。

- ①合唱の際、裏拍が取れない(アフタービートを感じるができない) (10%)
- ②複雑なリズム(付点、シンコペーション、弱起、休符、言葉とリズムの不一致)に困難を感じる (38%)
- ③テンポやリズムを皆と合わせられない (24%)

ここで、特筆すべきことは、調査参加者のうち中学校・高校の音楽教師全員が「ある」

と回答したことであった。また、小学校教師の「広域で行う音楽会の発表会（4年生参加）や卒業式などに、やや高度な合唱曲に挑戦した際に感じる」という記述内容からもわかるように、やや高度な曲の演奏に見合ったリズム感が養われていない実情が示された。

その際に教師が行った対処指導の内容は、次のようなものであった。括弧内の数字は「ある」と答えた人数に対する相対度数である。

- ①リズムを言葉に置き換える（14%）
- ②リズムを手拍子で叩く（24%）
- ③テンポを遅くして練習する（10%）
- ④子ども達同士でリズムの交流をする（14%）
- ⑤個別指導をする（29%）
- ⑥繰り返し練習する（24%）

これらの多様な対処法からは、教師が教科書や指導書に頼らず、独自の指導法を模索し奮闘する姿が推察された。

3.5. リズム指導に関する教師の意識

次に、指導する教師は、リズム指導に対してどのような意識を持っているのかを、以下の設問から調べた。

- 7-1. 音楽の授業の中で、リズムに関する活動や指導を意識して取り入れていますか。
1. 意識して取り入れている
 2. 特別意識していない
- 7-2. 7-1で「1」を選ばれた先生は、どのような時に、どのような指導をしているのか、具体的に教えてください。

7-1の結果は、次のようになった（図8）。

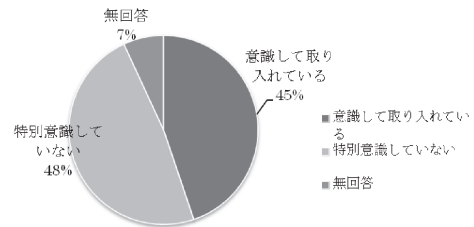


図8 リズム指導に対する教師の意識

図8のグラフから、教師のリズム指導に対する意識が二分されていることが目視された。

リズム指導を「意識して取り入れている」と回答した教師からは、授業の始めや終わりに活動を位置付けてリズム感を育成している様子や、曲を覚える段階で基礎的な音楽要素を理解させるためにリズム打ちを取り入れて指導している事例等が報告された。

リズム指導を「特別意識していない」教師からは、指導書に指示されている年間に必要内容を行っているというものであった。

これらの結果から、リズム指導に対する教師の意識は二分していることから、実際の指導内容に差が生じている現状がわかった。

3.6. 系統的なリズム指導教材の必要性

以上の調査内容を受けて、質問項目の最後に、小学校におけるリズム指導カリキュラム開発の要否について尋ねた。この設問に関しては、小学校での指導経験を持つ教師に限定して実施した。

8-1. 小学校の教科書教材において、低学年のものにはリズム指導の具体的な記述がありますが、中学年以降は顕著に少なくなります。リズム指導について、中学年以降も、系統的な指導内容を示した教材の必要性を感じますか。理由もつけて教えてください。

1. リズムの系統的な指導教材が必要である
2. 中学年以降は、とりたてて必要ない

結果は、次のようになった(図9)。

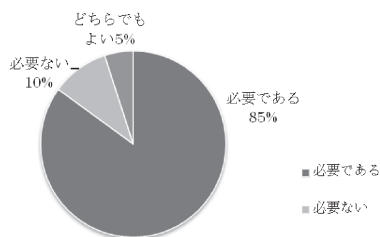


図9 小学校における系統的なリズム指導教材の必要性

小学校での指導経験をもつ教師20人から回答を得、その85%が系統的なリズム指導教材の必要性を感じていた。その理由を尋ねた自由記述欄からは、以下の内容が記された。括弧内の数字は「必要がある」と答えた人数に対する相対度数である。

- ①リズム指導は、繰り返してこそ定着する(18%)
- ②器楽や合唱指導に活用できる(35%)
- ③中学年以降は指導の中心が「音の重なり」に移行していくが、「リズムの重なり」も指導すべき内容である(6%)
- ④指導事項が明記されていると指導しやすい(特に、小学校において、音楽以外の教科を専門とする教師にとっては指導すべきことがはっきりしていた方がよい)(12%)

- ⑤体育でダンスが導入されたことから、音楽でもエイトビート等のノリを指導していく必要がある(6%)

これらの記述は、調査に参加した教師達が、リズム指導教材の要否について、リズムの効果的な指導法、全体的な音楽表現力の強化、さらには、芸術教科特有のわかりにくい指導の改善、多教科との関連等、多視点から捉えて記述したことが伺え、小学校における系統的なリズム指導計画と具体的な教材の必要性が示された。

4. まとめ

教師対象に実施した今回の調査から、子どものリズム感の実態や指導の現状について次のことが明らかになった。

- ・現代の子ども達のリズム感は、二極化している傾向にある。
- ・子ども達は、リズム活動に意欲的に取り組む一方、系統的な指導に欠けるため、段階的に能力が培われているとは言い難い。
- ・3/4の教師が、子ども達の音楽表現時におけるリズムのつまずきを感じ、その対処指導を行っているが、その方法については個々の教師にまかされている。また、リズムのつまずきは高度な曲においてほど認められる。
- ・リズム指導に対する教師の意識は二分し、それにより指導内容に差が生じている。
- ・小学校において、ほとんどの教師が、系統的なリズム指導計画及びその指導教材を求めている

以上のことを踏まえ、今後さらに、小学校での調査・実験を実施し、音楽的発達と音楽的文化化の両観点に立ったリズム指導カリ

キュラム開発に向けて、より精緻な検討を重ねていきたい。

付記

本研究の一部は、平成25～27年度科学研究費補助金基盤研究C（課題番号：25381219，研究代表：水野伸子）の助成によるものである。

引用・参考文献

- 阿部純一・星野悦子（1984-85）. 音楽の認知心理学的研究について 昭和59, 60年度科学研究費補助金（試験研究2）研究成果報告書 北海道大学, 9.
- Corrigan, K., & Trainor, L. (2010). Musical enculturation in preschool children: Acquisition of key and harmonic knowledge. *Music Perception*, 28, 195-200.
- 後藤靖宏（2000）. 音楽心理学におけるリズム研究 谷口高士（編）音は心の中で音楽になる—音楽心理学への招待 北大路書房 55.
- 藤村昌央, 近江政雄（2008）. 手拍子によるリズムの知覚時における脳活動の違い 信学技報 電子情報通信学会, 57-61.
- 井戸和秀（1990a）. 音楽における拍子概念と表現に関する一考察（Ⅰ）—ヴァンサン・ダンディの緒論を中心として—岡山大学教育学部研究集録 第84号, 43-53.
- 井戸和秀（1990b）. 音楽における拍子概念と表現に関する一考察（Ⅱ）—ヴァンサン・ダ

- ンディの緒論を中心として—岡山大学教育学部研究集録 第85号, 1-9.
- 井戸和秀（1990c）. 音楽における拍子概念と表現に関する一考察（Ⅲ）—アクセントを形成する種々の要因に関して—岡山大学教育学部研究集録 第86号, 191-202.
- 井戸和秀（1991）. 音楽における拍子概念と表現に関する一考察（Ⅳ）—その成立過程と自然リズムの観点から—岡山大学教育学部研究集録 第87号, 155-166.
- 小泉文夫（1980）. おたまじゃくし無用論 青土社
- 水野伸子（2013）. 調性感・ハーモニー感の獲得による幼児の音楽理解 Open Forum 放送大学大学院教育研究成果報告 第9号, 48-53.
- 難波正明（2011）. アメリカの音楽教科書「Share the Music」における音楽構成要素の学習について 京都女子大学発達教育学部紀要, 49-55.
- 大串健吾（2010）. 音楽のリズムと言語のリズム. SP, 音声109（451）電子情報通信学会技術研究報告, 7-12.
- 上畠力, 木本治子, 沢田篤子, 松村直行, 馬淵卯三郎（1979a）. 小学校歌唱教材におけるリズムパターン（第2報）大阪教育大学紀要 第V部門 第27巻 第3号, 315-327.
- 上畠力, 木本治子, 小島律子, 沢田篤子, 松村直行, 馬淵卯三郎（1979b）. 児童期におけるリズム感の研究（第1報）—下位レベルのリズム認知特性—大阪教育大学紀要 第28巻 第1.2号, 39-50.